

## 25. 当院における不安定狭心症の臨床的検討

高橋成和, 山田克己, 森尾比呂志  
長谷川修, 藤森義治, 尾世川正明  
(成田日赤)

今回, 不安定狭心症を自験例67症例につき検討した。心カテ上, 何らかの冠動脈病変が存在した例が全体の64%をしめた。リスクファクターとしては, 高血圧を持つ例の頻度が90%程度と最も高かった。入院時に心電図変化があった例でも, なかった例でも, 重篤な冠動脈病変を含め, 同程度に冠動脈病変が潜んでいた。不安定狭心症の診断には, 詳細な病歴聴取の必要があり, 疑った場合には積極的な入院治療の必要がある。

## 26. 拡張型心筋症症例の心臓鏡による評価

山田克己, 森尾比呂志, 長谷川修  
藤森義治, 松尾 哲, 尾世川正明  
(成田日赤)  
内田康美 (東邦大佐倉)

拡張型心筋症 (DCM) の評価を心臓鏡を用いて行った。14例の DCM を対象とし, 右心・左心カテーテル検査, 冠動脈造影, 心臓鏡, 心筋生検を施行した。心室内膜側の色調が淡褐色の群では心筋組織の内膜肥厚が強く, 白色調の群では弱い傾向があった。心筋収縮性の低下が著明の群では左室拡張末期径が大きく, 駆出率が低い傾向があり, 軽度の群ではその逆であった。心筋疾患の心臓鏡所見をさらに症例を重ねて検討する必要がある。

## 27. 間質性肺炎を合併した原発性抗リン脂質抗体症候群の1例

須藤 明, 堀江篤哉, 加々美新一郎  
塚本 哲, 吉田象二 (旭中央)

## 28. 当院における抗核抗体 (ANA) 陽性者についての検討

竹尾愛理, 高橋万里子, 瀧澤史佳  
佐々木憲裕, 明星志貴夫  
(川鉄千葉)

対象は93-95年度中に新規に ANA を測定した561例。全体の ANA 陽性率は41%。陽性率が高かったのはレイノーを伴うもの, 4症状以上あるもの, 1症状のみ場合は発熱単独の群で, これらの症状を診た場合は ANA 測定を考慮すべきと思われた。ANA 陽性群の最終診断は膠原病及び類縁疾患が18%, 臓器特異的自己免疫疾患が17%の順に多かった。ANA 陰性群は肝疾

患17%, 自然軽快その他19%の順に多かった。

## 29. 当院における喘息診療の現況

田中 眞, 三島修一, 神崎哲人  
(国府台病院)

当院の喘息外来の現況を述べた。患者背景では, 当院の性格上精神疾患合併症例を多く認めた。治療ではステロイド吸入薬およびテオフィリン製剤の使用が多かった。次に喘息教室について述べた。医師以外のパラメディカルスタッフの参加により様々な情報が与えられ, 多数の患者の参加もあり好評であった。喘息教室などによる外来患者数の増加と反比例して, ステロイド吸入薬の繁用や患者教育の徹底により入院患者数の減少を認めた。

## 30. Insulin Autoimmune Syndrome を呈したバセドウ病合併多発性筋炎の1例

北川 裕, 布施まさみ, 林 良明  
永井 順 (沼津市立)

①低血糖発作が頻発したバセドウ病合併多発性筋炎の1例を経験した。

②IRI, CPR 及びインスリン抗体高値のためインスリン自己免疫症候群 (IAS) を考え, バセドウ病の治療薬 MMI を PTU に変更したところ低血糖発作は治癒した。

③HLA 遺伝子解析では IAS に相関性の強い DRBI 0406であった。

④低血糖発作時には SH 基を有す薬剤の服用をチェックする必要があると考えられた。

## 31. 既存資料からみた松戸市の在宅ケアの現状について

山下道隆, 山口卓秀, 大島仁士  
(東松戸)

## 32. 当院の在宅医療における時間外対応の現状と課題

三上恵只, 鈴木潤子, 桑原憲一  
栗原 勲, 浅川雅透, 小野寺誠  
大河原邦夫, 前嶋 清  
(小見川総合)

介護保険法も成立し, 在宅医療は今後その重要な一つの柱として, 充実が求められる。今回在宅医療における時間外ニーズを把握することを目的に時間外相談について調査分析を試みた。その結果①病状急変時における対応②ターミナルにおける家族への精神的サポー